



日中は暖かく心地よく過ごせる日もありますが朝夕は冬の厳しさを実感する日が続きます。コロナ、インフルエンザの流行に加え全国的にアデノウイルスによる感染症の拡大が懸念されています。私事ですが今月中旬に帯状疱疹を患い体調を崩すことになりました。歳をとり患うと重症化のリスクは高まります。現代医学の進歩で程よく回復と至りましたが無理は禁物です。年度末、忙しいこの時期、お父さん、お母さん、体調管理には十分気をつけて下さい。

## 「主体性を考える」

昨今の保育においては主体性という言葉は飛び交うように使われている。「ひとり、ひとりが主体的に活動して・・・」「ひとり、ひとりが周囲から主体として受け止められ・・・」「それぞれの主体性を支える・・・」等々、でもはたしてその「主体」という言葉を理解し保育に反映することはできているのかそれぞれの園で検証していくことが必須であると考えています。おおぞら保育園ではまさしく取り組んでいる真っ最中であり、より良くなっていく上での今は過渡期と言えます。

園生活は集団生活の場であるものの集団が優先される前にひとり、ひとり（個）の育ち、成長が尊重されなくてはなりません。

例えば絵を描くことがあるとする。ひとりの子がやりたくないと伝えてきたらどう対応するだろうか？その子の思いを受け止め「主体」を考えたときに、そばにいる大人は「絵を描かせよう」

「描かせなくてはいけない」という思いで接することではないでしょう。描きたくないという思いを受け止め、尚且つその子の描かない、描けない要因や背景を考え、対応をしていくことが大切と考えています。

別の例です。鬼ごっこをみんなでやろうとなった、一人の子が「鬼ごっこは嫌い、やらない」と言ったらどうだろう「みんなで決めたことだからやろうよ」とすぐにその子を鬼ごっこに入れようとするだろうか、その子なりの嫌いの理由や要因があるわけである。保育の中では「できない」「やりたくない」と子どもが思いを出す場面に出会うことは少なくない。「すぐつかまって鬼になるから」「逃げるのが上手ではないから」「ほかの遊びがしたい」等々その子の思いに寄り添い具体的な対応を考え接していくことになる。子ども達の消極的な場面ではつい大人は「決めたこと」「決められたこと」に入れようとする流れを選択してしまう。まずはその子の意思決定のなかで起こったことを受け止め適正な対応につなげていかななくてはなりません。

又逆に「やりたい」「やってみたい」という思いにも寄り添い対応してあげることも大切にしなければなりません。つつい大人は自分の、プラン通りに歩ませようとする傾向にある。保育計画においても日々やることをきっちり決めてしまえば当然、柔軟な対応等ができるものではない、先にあげた例のように子どもの主張（声）に対応することは難しくなる。結果、子どもは納得のいかない我慢を強いられることになる。

子ども主体ということが流行語のように保育に蔓延しているがその主体自体の理解に乏しく適正に保育実践に反映できていない保育士が

なんとも多くいることです。参考書から引っ張り出したきれいな言葉で主体を語らず、常に面前の子どもに注視してひとりひとりに対応することが大切なことを再度、心にとめ保育にあたることが大切ではないかと思っています。思うだけでは何も始まらず具体的な行動も要求されています。



## 「劇・子ども主体の取り組み」

もう11月が終わろうとしています。3歳児以上の子ども達の生活では劇（劇遊び）が盛んにおこなわれるのもこの時期です。日ごろ、読み聞かせている絵本をもとに遊びながらお話を再現し仲間と共に豊かな遊びを作っていくというものです。

今、5歳児は劇に取り組んでいます。できるだけ子ども達主体の取り組みを心がけています。大人が描いたシナリオや活動内容がきっちり決められていたら、子どもの主体を支えていく保育はできない。題材も台詞も役割も大人が決めていたら子ども達の創造、発想も随分と削がれた内容になってしまう。

劇の題材決めは読み聞かせた絵本から選定され、それぞれが遊びの中でイメージを膨らませていく、決められた台詞はまだなく、遊びながら、子ども同士のやり取りの中で使う台詞が決まっていく過程をおおぞら保育園では尊重している。それぞれの子どもが劇あそびのなかで何を感じているのか、興味や関心はどこにあるのか、何に面白さを感じているのか、集団という大きな単位でみる前に、ひとり、ひとりに焦点をあて

ることに努めている。

仲間と共にやる以前にひとりひとりの子どもの主体を支え、理解してあげなくては集団での活動は成立しないと考えています。

5歳児頃には子ども同士の関係性が育まれてきて互いが学び合い、大きな目標に向けて共に協力していく取り組みが可能になってきます。だから、この時期にあえてひとり、ひとりが育ってきていることをベースにみんなで取り組む劇活動を取り入れています。

## 「行事名のこだわり」

平成30年度から発表会の名称は使わず4、5歳児（劇の会）3歳児（劇遊びの会）と名称を変更しました。この時期の生活（活動）の中心に劇活動（劇あそび）があります。

子ども達からすれば発表のために劇を行っているわけではありません。発表会という行事のなごりから当然、劇の会当日も両親にみってもらうことになるのですが子どもの視点から考えてみると「楽しく遊ぶ、または遊んでいる劇を見もらう日」となります。大人の感覚からはズレがあることでしょう。

そもそも、大人が考える「発表」という言葉の概念には世間一般に知らせることや表向きに知らせることを連想させ、時にはある一定の水準までの教育や獲得したものを見せていただけるものと考えてしまいます。

子ども達の主体的な取り組みを考え数年が経過します。私たち大人は既成の概念を一旦、手ばなし、純粋な取り組みの理解に努めていけるようにしていきたいものです

（おおぞら保育園 園長 廣部信隆）

